

○ 今月のみことば

N. J

「彼らが主を仰ぎ見ると、彼らは輝いた。」

(詩編34編5節)

11月は「死者の月」です。亡くなった方のために祈りを捧げます。皆さんはどのような祈りを捧げますか。まず、亡くなられた方(両親、祖父母、兄弟姉妹、身近な人など)のことを思い起こし、次にその方々と生前どのように接したかを思い出して祈ることだと思います。そうすれば、その方々は自分の中で生き続けます。死は別れを意味することばですが、私たち一人ひとりの思いの中で生き続けることができるのではないのでしょうか。祈りが、亡くなられた方と私たちを繋いでいると考え、私たちがまた、亡くなられた方の見守りを受けていることを実感できるのではないのでしょうか。

ほほえみは、お金を払う必要のない安いものだが
相手にとっては非常な価値をもつものだ
ほほえまれたものを、豊かにしながらも
ほほえんだ人はなにも失わない

これはシスター渡辺和子さんが書いた「面倒だから、しよう」の一説です。ほほえみを与えても私たちからは何も減ることはないですが、もらった人を限りなく豊かにするとも書かれています。「ほほえみ」と聞いて思い出すのは、「マザーテレサのほほえみ」、私の机の上で、いつもほほえんでおられます。

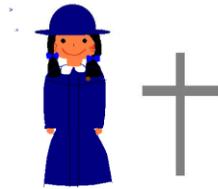
私はこの夏、義理の母を亡くしました。母はいつどんな時もほほえみで接してくれました。楽しんでいるときでも、悩んでいるときでも、そのほほえみで包んでくれました。今もそのほほえみを忘れることができません。

皆さんも、ほほえみで周りの人と接してみませんか。

生徒の心に語り掛けたいこと

英語科 S. T

今年も11月上旬に、保護者のご協力のお蔭で「愛徳学園バザー」が行われました。いつもこの時期になると中高の旧校舎を思い出します。1995年1月17日早朝に起きた「阪神・淡路大震災」によって学園の校舎は壊滅的な状況におかれました。その後、2年間プレハブ校舎での非常に厳しい学校生活を余儀なくされました空調設備はありましたが、真冬の頃には生徒達はコート、マフラー、手袋を着用して授業を受けなければならない環境でした。プレハブ校舎の教室や外の限られた場所を使って授業、朝礼、部活動を行いました。入学式、卒業式や文化行事は愛徳幼稚園の講堂を、また体育大会は近隣の高校の運動場をお借りして行いました。震災が起きる前までは、現在と同じように普通に教室や体育館で授業を受け、部活動ができていました。新校舎が完成し、プレハブ校舎から新しい教室に机や椅子を運び込んだ時、生徒達の歓声は本当に“喜びに沸ふれていました。大変な環境の中にいたからこそ、その時の喜びがとても大きかったのだと思います。私達は大切な人や物を失って初めて、その存在の「ありがたみ」に気づくのかも知れません。それだけに今、私達が、毎日生活しているこの校舎や設備を大切に使わなければならないと思います。



7年前の東日本大震災、今年7月の西日本豪雨や台風21号、9月のインドネシア地震など国の内外でいくつも自然災害が起きています。その災害で今もなお困難な生活から元の生活に戻ることができていない方々が多くいらっしゃいます。今普通に生活できていることを決して「当たり前」のことと考えず、感謝して生きたいと思います。